

特集 野生動物と占冠人



撮影：平成30年 双珠別にて
提供：写真家 門間 敬行さん（字中央）

いつも村の野生鳥獣対策にご理解、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。毎月の広報で野生鳥獣対策の状況や動物たちの様子を、できるだけいきいきと、多角的にお伝えするよう心掛けています。

村の野生鳥獣の担当業務を始めて7年余りですが、まだまだ知らないこと、迷うことがたくさんあります。毎日が勉強で、村の皆さまや野生動物たちに教えられ、導かれる日々です。懸命に生きる野生動物に対し、私たちはどう生きるのか。すべての出来事が、その問いにつながっているように感じられます。

野生動物に負けない村づくり、野生動物を活かせる村づくりに努めてまいります。今後ともよろしく願いいたします。



占冠村役場
令和2年度野生鳥獣専門員
浦田 剛

占冠村なればこそ

占冠村の野生動物と聞いて、皆さんはどんな動物が思い浮かぶでしょうか。きのう出会ったかわいいあの子。毎年畑を荒らす憎いアイツら。はて何も思い浮かばない…。お住まいの所在や生活様式により、ひとそれぞれかと思えます。いずれにしても、豊かな森林に囲まれて暮らす私たちは、誰もが多種多様な森林性の野生動物と、隣り合って生活しているといえるでしょう。

そして、多くの野生動物に囲まれていることを、皆さんはどう感じますか。喜ばしく感じることもあれば、怒りや不安もあると思います。増えるのは困るけれど、減るのも心配。被害は困るけれど、殺すのはかわいそう。多くの方がいくつもの思いをお持ちではないでしょうか。

日本人が野生動物と付き合う姿勢は、時代を背景に揺れ動いてきました。おそらく太古の昔から、肉や皮のための捕獲があり、捕りすぎたり捕り足りなかったりを繰り返してきたと思われませんが、現代

に至り、産業や生活の変化を背景に、乱獲や環境圧迫と保護の振れ幅が大きくなりました。高度経済成長期以降、社会の表では自然保護が叫ばれ、自然に手を加えないことが善、捕獲は悪と意識されてきたように思われます。

それが今世紀に入り、シカやイノシシの勢力拡大、アライグマやキョンなどの外来種問題が大きく取り上げられ、国を挙げて駆除に邁進するなか、被害意識の下で捕獲への抵抗感は薄れ、ジビエはブームになりました。それぞれの時代、現場には切実な状況があるのですが、社会の表層を覆うのは、どちらかといえば、実情から浮遊した、日和見的な二極論です。

野生動物は増えたり減ったり、人に被害を出したり食べられたりするもの。さらには移出入や種分化、絶滅も起こります。個々の事象に冷静さを失わず、社会の風潮にも流されない、野生動物に対する持続可能な基本姿勢を持つことはできないものでしょうか。

占冠村は、実生活で野生動物と関わる人口の濃い地域で

あり、地に根を張った参考事例が豊富にあるはず。今月は、村で野生動物と深く関わる方々を紹介し、その姿と意思を通じて、野生動物との対し方を皆さんとともに考えていきたいと思います。

熾烈な被害、奮闘する農家

村で野生動物と対する人たちの筆頭に挙げられるのが、私たちの食糧供給の源流を担う、農業に携わる皆さんです。村内の農地は山林に包まれて点在し、全周から野生動物の侵入を受ける立地にあります。厳しい環境条件を受け継ぎ、あるいは選んだ方々は、どのような思いをお持ちなのか、若手を中心に、お話を伺いました。





ゆり根農家を営む伊達さん
に、被害の規模を伺いまし
た。「昨年の春先、ニニウの
圃場^{ほら}でゆり根の種をほとんど
食べられてしまいました。シ
カの被害は想定してしまし
たが、まさかこんなに土をほじ
くり返して根こそぎ食べられ
るとは思いませんでしたね。」



ゆり根の販売には長い期間が必要。昨年は収穫前
の種を含め、販売予定のゆり根も被害を受けた。

と、深刻な被害の様子を語っ
てくれました。被害状況を目
にしたとき、真面目に離農を
考えたとき、当時のことを振り
返ります。それでも、「うち
のゆり根は、一般消費者だ
けではなく、名のあるフレン
チレストランでも取り扱って
いただいています。中には、
ゆり根の圃場を見に来てくれ
るシェフもいます。僕らの作
ったゆり根に期待してくれる
お客さんがいる。その期待に
応えるべく、質の高いゆり根
を提供し続けます。野生動物
による被害は天災みたいなも
ので、僕らの技術・想像力が
欠如していた。彼らと上手に
付き合っていくためにも、学
達さんご夫妻はにっこりと笑
いました。」

▲ゆり根農家の伊達さんご夫妻
自分たちで始められる農業形態を探して
いたときに出会ったのは、とあるゆり根
農家。そこで食べたゆり根が、びっくり
するぐらい甘くて美味しかった。僕がゆ
り根農家を始めたきっかけです。占冠村
の自然に囲まれて、家族でのびのびと生
活できるこの環境に満足しています。



▲家族で農場を営む江頭さん
野生動物も食べたくなくなるようなおいしい
野菜を育てることができた恵まれた環
境。食卓に野菜が並ぶ環境。こうした日
常が貴重であることを感じながら、私
たちは野菜を作っています。

生命活動を維持する上で欠
かせない『食』。私たちが毎
日食事するのと同様に、野生
動物もまた、命をつなぐため
に必死で『食』を探す日々で
す。高栄養の食物が密集した
農地は、彼らにとってまさに
楽園。農家の苦勞も知らぬ顔
で、遠慮のない食事が始まり
ます。
上トマムでカリフリ農場を
経営する江頭さんの野菜畑や
牧草地も、シカの被害を受け
ています。畑へ侵入するシカ
により、設備が破壊されるこ
とも。

「シカはあの巨体で百八十
cmもある電気柵を飛び越えま
すが、中には電牧線を引きち
ぎったり、電牧線に絡まった
りすることもあります。設備
の修理や再購入などで苦勞す
る面もありますね。」
ニワトリやウサギはキツネ
やテンに、ヒツジやヤギはヒ
グマに襲われられないよう警戒
し、気が休まりませんが、「う
ちの犬たちが気付いて教えて
くれることも。みんな家族。
役割を分かっているみたい。」
支え合いながら、村びとの食
づくりにも励みます。



▲肉用牛繁殖農家の堀井ご夫妻
ここで生まれた牛が、取引先で最高品質
の牛肉として供給されたこともあります。
消費者の顔や名前もわかりません
が、どこかで皆さんのお腹を満たすこ
とができていのであれば、私たちの苦勞
も報われると思います。



▲カリフリ農場のひよこ。
経営初期に、野生動物に
よる襲撃を受けたことも
あるそうです。

食害だけではない。尽きない悩み。

双珠別で肉用牛繁殖を営
む堀井さんも、牧草や野菜
を食べられてきました。が、
お話を伺うと、畜産業特有
の意外な問題を教えてください
ました。
「最近はお敷地内でタカに
野良猫が襲われ、遺骸が残
されます。タカは渡り鳥と
接触しているかもしれない
ので、防疫上、遺骸を放置
できません。また牛が出産
すると、キツネなどが匂い
を嗅ぎつけ、侵入しようと
畜舎周りをうろつきま
す。遺骸処理や侵入対策などの
ために本業が遅れることも
あります。」
聞けばなるほどです。



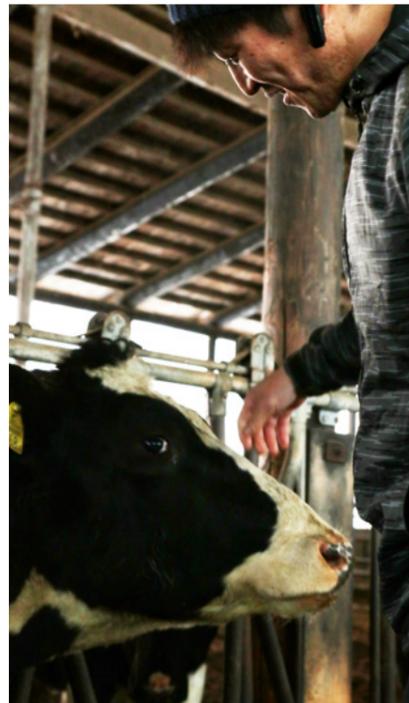
甘くさわやか、くまちゃんコーン。熊
崎さんのスイートコーンは、何年もア
ライグマの食害を受けてきました。紐
の網、鋼線の網を試しました。「中途
半端なものでは、維持しきれない。効
果も疑問。」いまは電気柵を丁寧に張
り、手入れを欠かしません。「手間を
掛け、なんとか被害を抑え込んでい
る。」身近な夏の味覚に、頭の下がる
ご苦勞が隠れていました。

野生動物も僕らと同じ 生きるのに必死なだけ

「デントコーン畑で、毎年
ヒグマ、シカによる大規模な
被害があります。」乳用牛を
飼養している鈴木貴大さんが
静かに語ります。「自助努力
で対策を講じねばなりません
が、作付面積も広大で、シ
カ柵はどうかと試算したけ
ど、設置費用が莫大で。維持
管理費も考えると、簡単に支
出を決められる額ではありません。
ヒグマには効きません



▲クマやシカにより食べられた鈴木
牧場のデントコーン畑。シカは、
デントコーンの実が成る前から食
べてしまうため、クマに比べて被
害が大きくなるそうです。



▲農家や一般家庭の菜園にも被害を及ぼして
いるアライグマ。強い繁殖力を持つ。

し。」対策の悩みは深刻です
が、「ヒグマを市街地に入れ
るのは、絶対に防がないと。」
と、鈴木さんは地域の安全も
気遣います。
「僕らが必死に生活してい
るのと同じで、彼らにも必死
の生活があるんですよね。」
加害動物までも思っている鈴
木さん。複雑な心境を語って
くれました。

捕獲				狩猟
その他	学術捕獲	許可捕獲		
		数の調整	被害防止	
			生活安全被害	
(通称「駆除」)				

▲野生鳥獣の捕獲

予め定められた制限の枠内で自由に捕獲する狩猟と、目的に応じて個別に許可される許可捕獲があります。



▲占冠村猟区

区域ごとに狩猟を管理する猟区制度を平成26年に導入。狩猟には、毎日に予約承認の上、ガイドが同行します。



▲これでも若手

村在住ハンター8名、43～67歳で平均51.4歳。全国では平均が60歳以上とみられる。求む若人！



▲幅広いスキル

射撃だけでなく、痕跡の観察や生態の理解も大切。



▲シカ着弾点の実績

動物福祉や衛生管理のため、急所を狙撃。



▲スコープでシカに照準 (6倍、60m)

150メートルに調整したライフル銃では2センチ高く着弾し、眉間を射抜く。



◀ニニウファームを営む黒井さん
ニニウで牧羊とシカ肉の生産を営む。「今はまだ、自分らのこと、周りに迷惑をかけないことで手一杯。でもいずれは、いろいろな面で地域に貢献していきたいと思っています。」



森から里へ いのちのきずな

～捕獲従事者と獲物の物語～

原点を見つめて

国は野生獣肉(ジビエ)を振興し、有害鳥獣駆除の推進力とする方針ですが、元来、駆除は獲物を減らす作為で、持続的な利用とは方向が異なるもの。社会の対応は矛盾を秘めています。

野生動物は人間社会の外側にいます。社会の仕切りをもとに対処を考えがちですが、まずは生身の人間として、野生動物にどう向き合うのか、実像からその原点を探ってみましょう。

いのちをいただくこころ

「役所は駆除しろと言いつ、ハンターは捕りたいから捕る。本当はそれだけではない。後先も考えないと。」高橋さんが言葉少なく語りま。野生獣肉の生産販売会社を営み、猟友会占冠部会長も務める六七歳。野生動物をめぐる村独特の社会風土を築いてきた一人です。

「シカもヒグマも、駆除すれば死体が残る。手間と金をかけて捨てるか、食べても臭い硬いと言われて終わり。命がもったいない。」それでは

美味しい肉を届けたい

ニニウで羊牧場を営む黒井さん。就農から六年が経過しました。牧場と並行してシカ猟とシカ肉生産も手掛けます。黒井さんは、就農前から村のシカ対策に協力してきました。そのスタイルは独特で、『取引先のレストランから注文を受けて捕獲する』というものです。「味はバラつくし、納期も決められないけど、間違いなく良いものだけを納めます。」必ず頭を射抜くために、射撃の腕は勿論、忍耐も求められます。「地面を這い進んで、当たる距離までは我慢。」捕獲個体の扱いは優しく速く。衛生管理も徹底します。「やるべき手順は省きませんが、それだけで十



▲森のかりうどを営む高橋さん

「命をいただくのだから、できるかぎり隅々まで、きれいにおいしく食べてあげたい。」という理念を掲げる高橋さん。品質の高い食肉の提供には、猟師の日々の研鑽が欠かせません。

いけないと、良い肉を作ることに取り組んできた高橋さん。仲間を増やし、支持を集めたことが、村のエゾシカ対策基本構想と野生獣処理加工施設、そして自身の起業につながりました。「捕ったシカは使う。」これは欲しいシカだけを使う他所のジビエ利用とは違う、際どい挑戦でした。「下手なシカを受け入れていたら潰れてしまう。」シカを苦しめない、そして安全で美味しい肉を得るため、撃つのは頭か首。血抜き作業と運び出す時間は品質に直結します。自ら実践して見せ、失敗するハンターには教えて厳しい言葉をかけてきました。「いま、村のハンターはすごい。」

みんな頭を撃つてすぐ運んでくる。こんな地域は他にない。「腕を磨き、労を惜しまず、正しい捕獲と良い製品を意識し、協力しているのです。」まな板に血が落ちない。臭いもない。違いは歴然。「でも高橋さんは笑いません。「この状況を作るのは大変。でも壊れるのは簡単。」経営を支えるのは個人的モラル。不安は拭きません。「役場はもっと状況を広く伝え、村を挙げて考えていけるようにしてほしい。」野生動物との関わり全体に視野を開き、共有する価値観を地域に根付かせていく。そんな願いが込められていました。

楽ではないけど、充実した暮らし。「占冠村の人と自然のおかげです。」と、言葉と笑顔に人柄が映ります。

自ら手掛け、見届ける

二人のハンター兼食肉生産者を通じて見えてきたこと、それはある種の完全性に近いものです。人と野生動物がいて、どう生きていくか。細分化された社会で忘れられた基本原則を、いま一度ひとつの生き様に重ねたなら、捕獲し、身を守り、食べる、猟師の像を結ぶのではないのでしょうか。



レストランダフネ RESTAURANT DAFNE (札幌市中央区)

黒井さんのシカ肉は、甘く優しい香り、熟成具合、季節ごとに異なる風味や肉質、全てが素晴らしく、シカ肉の概念を覆されるような衝撃を受けました。今後も黒井さんのシカ肉で最高のジビエ料理をご提供していきたいと思っています。
▶黒井さんのシカ肉を活用したジビエ料理



レストラン・メープル (字占冠)

占冠山村産業振興公社やジビエ工房『森の恵み』のように、山菜やシカ肉を加工する施設が村内にはあります。地元の食材を、本レストランのメニューに活用することが村への地域貢献になると思い、村産食材を活用しています。野菜の旬な時期には、村内農家さんの野菜をメニューに取り入れています。
▶村産シカ肉を活用した山菜カレー



(株) 森のかりうど



野生獣処理加工施設の加工室を利用して、シカ肉、クマ肉を加工生産、販売しています。



できたかな？ 今年のミッション

野外で採集したヒグマの糞からの遺伝子による個体識別



野生動物のことを私達の研究を通して少しでも村民の方々に知って頂きたいと思っています。

4年生 青木 郁弥さん

ライトセンサス調査による占冠村猟期におけるエゾシカの生息状況の把握



本研究が村での野生鳥獣対策に少しでもお役に立てれば幸いです。

4年生 星野 快斗さん

酪農学園大学内の圃場におけるエゾシカ追い払い調査



防除対策の大変さを身をもって痛感しました。調査結果が被害対策の普及啓発に役立てていけたらと思います。

4年生 金子 真珠さん

占冠村及び周辺地域におけるヒグマの遺伝的構造解析



野生動物に関して数多くのごことを学ばせていただきました。今後ともよろしくお願いいたします。

4年生 柴田 穂波さん

占冠村におけるアライグマの棲息状況調査



占冠村で実際に2週間に1度アライグマの調査を行いました！貴重な経験となりました。

4年生 義本香保子さん

占冠村猟区の野生鳥獣管理体制と課題を研究



占冠村の皆様、アンケートにたくさんのご回答ありがとうございました！

修士2年生 三好由布子さん

博士と学徒の占冠村

占冠村と酪農学園大学（江別市緑台）は、平成23年に『地域総合交流に関する協定』を結びました。自然・産業・文化・生活・観光・教育など幅広い分野での相互協力をうたっており、この中で野生鳥獣に関する連携活動を続けてきました。

占冠村は、野生鳥獣管理を学ぶ学生たちに、野外実習や卒業研究の場を提供します。また、村内で得られたデータや試料を提供することもあります。一方、酪農学園大学は学識経験者を村へ派遣し、アドバイザーとして村の要望に応じています。占冠村猟区管理運営委員会の委員として、また各種講習会などへの講師としても、その豊富な知見と洞察を発揮しています。

酪農学園大学は令和元年度、新たに『野生鳥獣管理学研究室』を設置し、より主体的に占冠村で活動する体制を整えました。研究活動は緒に就いたばかりですが、今後の発展が期待されます。

占冠村の動物たちのことをもっと知りたい。野生と隣り合う暮らしがもっと幸せなものでありたい。私たちと願いを同じくする彼らは、村民の心強い味方です。



野生動物保全技術実習（3年生）



仕掛けた杭からクマの毛を採取

自動撮影装置の設置

村のフィールドで 活躍する外部有識者の方々



佐藤 喜和 教授

ヒグマの生態や管理が専門。学生実習の指導や住民向けヒグマ講座の講師など、村との縁も深い。「学生実習では村の皆さんにいつも暖かく受け入れていただき、感謝しています。」



伊吾田宏正 准教授

シカの生態や管理が専門。占冠村猟区管理運営委員会の副会長を務める。「村の取り組みは、地域自らシカの資源管理をする先進事例になると考えています。」



伊藤 哲治 講師

新設の野生鳥獣管理学研究室を率いる期待の若手。占冠村で調査を展開。「占冠村の野生動物管理が、全国的なモデルとなるよう活動させていただきます。今後とも、よろしくお願いいたします。」



学びが育む社会の対応力

驚きから始まる
道外からの修学旅行を誘致し、村の豊かな自然を題材にした様々な体験学習を提供する『感響プログラム』。占冠村体験型ツーリズム協議会に参画する村内各分野の専門家が、高度な職能を活かして修学旅行生に対応します。エゾシカコースでは、農業被害やシカの解体加工に触れ、最後に食べて『命への感謝』を問いつつ、ヒグマコースでは、生息環境に身を置き、痕跡や餌資源に触れ、人との関係について議論します。

「森林も川も動物も、占冠村には素晴らしいものがある。SDGs（持続可能な開発目標）が叫ばれるいま、本当に求められる体験を提供できるはず。」感響プログラムの企画と運営を担う細谷さん（観光協会）は、地元民が見過ごす当たり前の自然に、北海道観光再興のカギがあると、言います。「修学旅行生たちには、森の近さもヒグマの足跡も、村での当たり前が驚き。学校も旅行代理店もその価値に気付いている。」大切なのは本物であること。野生動物は出会えないのもリアルティ。痕跡や捕獲個体も使用、体験の充実に工夫を凝らしています。量より質、地道に続けて十七年になるいま、微かな手応えを感じていると細谷

村の子どもたちが 学ぶもの

大きな足跡が横切る通学路。朝もやの中を鈴の音が渡ります。こうした日常を背景にいま、生きる力と豊かな感性を育む取り組みが進んでいます。

村立学校で始まったヒグマ教室。単に事故の予防法を覚えるのではなく、ヒグマの形態や生態を学びながら、自ら考え、応用力のある対応スキルを育てていきます。学ぶ場は授業だけではなく、生活の中で出会う体験が、子どもたちにしみこみます。「かわいそうやさんだね。」捕まったアライグマを見送る女の子のつぶやきに肅然とした



中央小学校での『ヒグマ教室』

細谷 誠 さん

多彩な経歴の中で、常に野外活動に携わってきたアクティビティのスペシャリスト。占冠村の森と文化、鶴川が運ぶ循環をテーマに観光・教育事業に取り組む。現在、占冠村づくり観光協会事務局長。



ました。恐れも悲しみも容赦なく感受する幼い心に寄り添いながら、どう伝えていくのか。子どもたちとの学びは、ごまかしの効かない真剣勝負です。

野生動物の傍らで 暮らす

「街も動物も、ずいぶん様子が変わりました。」生まれ育った上トマムで積極的に環境活動や社会奉仕に取り組む平塚さん。幼少から昭和四〇年代まで上トマムは農家が散在するだけ、ヒグマはそばにいたけど、見たことはなかったと言います。その後都市部へ転出。近年Uターンして来ると市街地があり、シカは増え、クマが街で目撃されるように。「今の若い人と同じで、自分も動物が捕られることに抵抗があります。」

地域ではゴミの扱いに課題があると指摘します。「生ごみを別の日に出す人や、そこに捨てる人がいます。うまくそうした人に注意を伝えてほしい。」平塚さんは自らも行動します。「近所の子どもたちを誘って、路肩や空き地のゴミ拾いをしました。」投

占冠人として

以上、村で野生動物と深く関わる方々を紹介してまいりました。私たちの占冠村は豊かな自然だけでなく、村民社会の側にも誇るべき特色を持っていました。意欲的で忍耐強い農家、シャープなハンター群とプロの食肉生産者、歴戦の自然ガイド、そして住民の高い公共意識と、優しくたくましい子どもたち。



トマム小学校児童が制作した注意看板

臆することなく野生動物に對抗し、また喜びをもってその恩恵を享受する。まもなく迎える雪解けとともに、各方面で、今年の活動が本格化します。